

正・政・清・聖・性・醒

炉ばたセイ談



平成24年秋号

漢字と見栄と体面

渋谷 繁樹

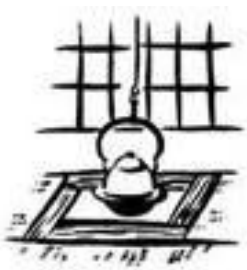
韓国で古本屋に入ると、仏典、歴史書、漢字の書籍が、ホコリをかぶっている。漢字を捨ててハングルに絞った国だから、ある年代以降は漢字が読めず、漢字の本は商売にならない。買ってもいいのだけれど、漢字も排斥一辺倒はまずいのではないのか、にっくき中国の発明品とはいえ読めるにこしたことはないのではないのか、となった場合、我が国の文物を持ち出したと言われるのもオックウだから、勿体ないため息だけで済ませている。

中国でも書籍は買わない。ニセモノをつかまされてへコムよりは、無視するに限る。

韓国大統領が対日で真っ赤になっている。中国共産党は将来の権力層をどうするかで暗闘を展開している。韓国タバコは結構いけるし、中国でもマントウの類は買い逃さない。体面とか見栄とかはもっとうにもならない。家ではチヂミやお好み焼きの大統領とか何よりスシの好物の主席になる人材がいつか育ってくれるのを気長に待つしかないのかもしれない。

目次

こんなブログを書いています	百田 陽一	1
もどき雑考	入来院重朝	16
時の過ぎ行くままに (2)	桐野 三郎	19
南米の旅	江藤ヤエ子	32
根を養えば自ずから幹育つ	宮下 亮善	36
庄内憧憬	下土橋 渡	40
人生わずかに八十年	福元 忠一	43
裁判員制度は司法の逃げではないか	益寄 滋雄	45
墨田の花火	串田 久子	47
牛の一生から男女の役割を考える	中西 喜彦	51
四百三十字の裏で	渋谷 繁樹	63
編集後記	編集担当	66



こんなブログを 書いています



百田 陽一

原稿の早いだけが、私の取り柄です。今回もすこぶる早い。というのも「IZA!」というブログに出稿したものをメールで送るだけだからです。このブログは何かのきっかけで始めたもので、これまで（二〇一二年五月二十一日現在）に十一本出稿し、アクセスの累計は約2500です。出稿するとその当日は60アクセスぐらいの反応があります。内容は政治、経済ものばかりで、とくに安全保障に関係したものが多いです。この問題になると、我々日本人のふがいなさを突き付けられる思いがし、勢いペンが走るといふ次第です。では、出稿順に掲載させていただきます

す。「遠慮なく、自由にモノの書ける冊子」というお言葉に甘えていろいろ脱線、荒唐無稽なんでもありの文章ですが、お許しください。

○動的防衛って何？

（二〇一二年四月二十九日）

在日米軍再編見直しの間報告が日米両政府から二十七日に発表された。二十八日2面の朝日新聞の記事によれば、両政府は「動的防衛協力」を打ち出したそうだ。朝日の記事によると、「動的防衛協力は日米の共同文書で今回初めて盛り込まれた概念だ。自衛隊と米軍が日本のみならず、その範囲をアジア太平洋地域に広げ、動的（ダイナミック）に協力することを意味する」そうだ。

米領グアムや米自治領北マリアナ諸島で両政府が費用負担して訓練場を造り、共同訓練するのだそうだ。グアムの移転経費を日本

が負担するのは、普天間の米海兵隊の一部がグアムに移転するためだ。それと今回の海外共同訓練の費用負担は質的に別の代物だ。集団的自衛権へと突き進むものと言える。

こんな内容のものを野田さんは「いい内容がまとまった」と満足そうに玄葉外相に語ったそうだ。政権内で議論を尽くした形跡もなく、ましてや国会の場で審議したこともなく、この質的变化に踏み込むのは乱暴すぎないか。「日本防衛の訓練なら問題ない」というのが政権の解釈だそうだが、それは違うだろう。アメリカの使い勝手がいいようにすること、そのように腐心することが日米間の協力ではない。真の協力とは、日本の憲法の枠内でのような軍事行動がとれるのか、率直にアメリカに主張し、嘉手納以南の返還可能な基地をできるだけ早く、期限を切って米国と交渉するなど実質的な成果を挙げるべきだ。何か

を変え、実績を作っていけば、国民の政府にたいする信頼も少しずつ高まる。とくに、沖縄にたいしてそのような実績を積み重ねるべきだ。

○「バリアは外務省」と石原さん

(二〇一二年四月二十八日)

外務省が日米問題、とりわけ日米の安全保障問題については、日本国にとって障害になっていることは、いまさら石原東京都知事に言われなくても多くの心ある日本人が感じていることです。二十七日訪米を前にして首相官邸に野田さんを訪ねた石原さんが、一連のニュースの中で、上記の外務省障害論をぶつたわけです。

一体野田さんに何を言いに行ったのか？尖閣列島の土地を東京都が買い上げる、とアメリカで言及したので、その件が話の俎上に

載ったことは間違いないでしょう。しかし、

石原さんは横田基地の返還問題で出かけたのだ、と表向きかどうか知らないが、言っています。メディアの報道では横田問題は無視し、尖閣問題をしつこく追いかけて、ニュースにしています。おしなべて、確かに尖閣問題は国の主権の問題だし、周辺の海の下に眠るかもしれない資源を考えると、重要な問題であることはよくわかります。しかし、アメリカに直接働きかけるテーマは横田ではないですか。考えてもみてください。首都のおひざ元にたいして必要でもなさそうな米軍の飛行場があり、さらに、それ故に航空管制が制約を受け、羽田発着の航空機、つまり私たちが福岡や札幌に行く飛行機は自分たちの空なのにとんでもない制約を受けているのです。何十年も。喫緊の課題としては、横田基地返還、そして首都圏の空を国民の手に取り戻す方が

先決ではありませんか。

フィリピンのケースは興味深いですね。今、フィリピンは中国のプレッシャーもあって米國頼みに変わりましたが、クラーク空軍基地とスービック海軍基地を返せと、米國に迫り、米國はほどなく、返しましたね。米國とはそういう面もあるのです。ですから米國の識者、政治家、軍人は不思議に思っているのではないですか。なぜ日本人は、東京都民は横田の返還に本気で立ち向かわないのか。ここまでこけにされて黙っているなんて信じられないと。

それから普天間問題。これまでも触れて来たように米國のレビン軍事委員長、やマケイン議員ら三人の議員の言っていることのほうが絶対正しいし、結局はその線に近づくとおもいます。日本のメディアは国防費を減らすために、議員がごねてるという見方、つまり

なにもできない日本の外務省の見解をなら
批判もせず報道していますが、アメリカの議
会のチェックの方が説得力が格段にあります
ね。金にシビアなのは当然で、そうではなく、
米軍のアジア重視の展開はどうあるべきか、
という根本から議員たちは考えているのです
よ。

○鳩山外交は本当にいらん外交

ですか？ (二〇一二年四月十五日)

九州旅行中だったので、反論が遅れました
が、鳩山元首相のイラン行は、そんなに「国
益を損なう」ものでしょうか。朝日新聞が天
声人語と社説で鳩山氏を非難もしくは揶揄し
ていましたが、果たして朝日の取り上げ方は
正しいのでしょうか。

確かにはつきりとした目的、目標なしにイ
ランに出かけた感はありません。しかし、こ



れまでの日本とイランとの「いい関係」の線
上で何かできないか、と鳩山さんは考えたの
でしょう。アメリカはこの日本とは全く逆で、
大使館占拠などひどい関係が一貫して続いて
きました。アメリカには、軍事的な威嚇しか
対イラン外交のカードは残されていないので
す。その軍事行動も実は大変難しいのは、す
ぐにわかります。イラク、アフガンに手を焼
き自国の若者をそして両国の市民を大勢殺し、
傷つけ、しかも世界中の人々がさすがアメリ
カと賞賛するような成果を挙げたでしょう
か？否であります。そこへいかにイスラエル
のためと言え新たな軍事行動は取れるはずが
ありません。とくに、いまは大統領選挙が差
し迫っているだけに、ありえないわけです。

これまでもアメリカは日本がイランで油
田開発を手掛けてもその邪魔をし、石油化学
のプラント建設に動こうとしてもそれにいち

やもんをつけてきました。アメリカにとって鬼門のイランで日本が成功するのは、耐え難かったのでしょうか。国の安全保障はアメリカ頼みで、経済面のいいとこ取りは許さない、と言うところでしょう。アメリカは度量の狭い国家ですね。もつと日本を通じてイランと少しでもいい関係に持ち込もうという発想がでないのでしょうか。

石油は国家にとつての命綱です。それを自分の思う通りイランの石油は買うなどと差配するのは、思い上がりもいところです。また仰せのとおり従います、というだけでは、ほとんど独立国とはいえず、アメリカの属国でしょう。今の民主党政権はアメリカ隷従しか選択肢がありません。アメリカが少々嫌がるのが、イランに対して鳩山外交で感觸を探るぐらいの度胸がなくてどうするのですか。外交は駆け引きです。戦後の日本外交は上目

づかにアメリカを見てその機嫌を損ねないように終始してきた外交にすぎません。それに慣れ切り、慣らされてきた外務省に何かを期待するのは土台無理な話です。そのような政治、政権、官僚を許し、認めてきた私たち国民・有権者に責任があるのです。

鳩山さんもどこが悪いと開き直つて自分の考えをもつと説明し、国民に訴えていかなければまた、「宇宙人」扱いで終わって仕舞います。それは日本にとつても不幸なことではないでしょうか。

○プーチンさん本気ですか？それとも

選挙対策？ (二〇一二年三月四日)

三月二日の朝日新聞夕刊で突然、若宮啓文・朝日新聞主筆を含む英、仏、独、伊、カナダ六カ国の新聞編集トップが、プーチン首相公邸で会見した1面トップ記事が出た。そ

して驚くべきことにいわゆる北方領土問題についてプーチン首相のほうから切り出し、「引き分けでいい」という意味深長なコメントを発したそうだ。

さてこれをどう見るか。ここはじっくりと腰を据えて対応すべきだが、一センチも動かなかつたこの問題が少しでも前進するチャンスであることは間違いない。一九五六年の日ソ共同宣言では歯舞・色丹の二島を日本に引き渡すことに言及しており、プーチンはその有効性を認め、さらに、二島以上の返還を匂わせる「引き分けのようなものだ」とコメントした。もちろん、プーチンの大統領再登場に反対の動きがあることに對しての危機感からリップサービスしているに過ぎない可能性は大だ。しかし、米国のアジア・太平洋重視方針、さらにはロシアの西、つまりヨーロッパがご覧のような経済危機というか、全体的

な地盤低下を見せつけられては、ロシアも成長地域のアジア、とりわけ日中韓の極東ににじり寄るしかないと判断してのことかも知れない。

北方領土に戻ると、鈴木宗男元衆議院議員（新党大地・真民主代表）が東郷和彦・元外務省欧州局長らと二島先行返還に動いたが、失敗、そのままこう着状態が続いているのがこれまでの経緯。その東郷氏は祖父が太平洋戦争の開戦時と終戦時の二度にわたって外務大臣を務めた東郷茂徳。父親の文彦も最後は駐米大使を務めた。父子二代にわたる外交官。そしていずれもソ連、ロシア通。和彦氏の「北方領土交渉秘話〜失われた五度の機会」のエピローグ歴史への証言に、母親のいせ（茂徳の一人娘）が晩年がんを患い、死の床にあつたとき、「ベッド脇にいた私に、母はふいに、祖父が外交の仕事で何が一番大切だと言って

いたのか知っているかと問いかけてきた。母は交渉で一番大切などころに来た時、相手に五十一を譲りこちらは四十九で満足する気持ちを持つこと、と言った」そうだ。プーチンの引き分けコメントはこの東郷茂徳の深く、味わいのある外交哲学と比較に値するものかどうかは、これからの日ロ交渉を見ていればわかるだろう。それにしても現政権に或いは外務官僚に対ロシア交渉に当たれる人材がいるのだろうか。不安である。

○野田首相大丈夫ですか？

(二〇一二年二月二十五日)

野田首相率いる現在の民主党政権のありようで、一貫して感じるのは、物事がきちんと決まってい行かないことだろう。福島原発事故の収束宣言がその代表的な事例。国民はだれも一日でも早くこのような宣言が出るの

を待っていたわけではない。それよりも本当に1号から4号までの原発をコントロールして欲しいのだ。

野田首相は消費税アップという地雷原にいいよ踏み込むようだが、小沢議員がこれに公然と反対しているのをどうするつもりなのか。さっぱりわからない。このまま押し切れるとみているのか。つまり小沢勢力、さらには鳩山元首相の影響力を重視していいのだろうか。小沢、鳩山と話を詰めないでこのまま行くと、五〇%以上の確率で小沢議員は民主党を割って政界再編に突き進むだろう。この辺の危機感というか政治的な本能的な感覚は、野田さんの場合どうなっているのかわからない。余り本気で気にしているように見えない。松下政経塾の出身者にある程度普遍的に感じられる傾向ではないか。とにかく、党内の半数近くに不安要素を抱えたまま

突進できるのだろうか。否である。日本の政治が大きく混乱するばかりである。少し遠回りでも小沢議員と膝詰で話し合ってぎりぎりの妥協点を探りだして何ぼの世界だろう。

沖繩に行くそうだが、仲井真知事に何を言うのか。いまさら米軍基地の七十四、七十五%が沖繩に集中しているのを「申し訳ない」と言いに行くのか。それとも沖繩への特別な経済的支援をちらつかせ、辺野古をよろしくと頼みに行くのか。まさかそんな愚劣なことはない、と思うが。そうではなくて米軍の世界的な再編を見据えて沖繩の position を真剣に考え、軍事基地ではない、台湾、中国に近い、かつて中国の冊封国でもあった琉球の歴史的経緯、地政学的な advantage に着目して真に沖繩を魅力的な存在にするため政府がなにをすべきか、語りに行くのが筋だろう。その程度のことにはヤマトンチューとしては沖

繩に対して当然なすべきことだろう。軍事基地は厳然として存在するが、もうその先の沖繩のことを考えないと、ある日突然米国が海外の基地もうやめた、と言ったときどうするのか。共和党の大統領候補、ロン・ポールは七十五、六歳で勝ち目はないが、海外からの米軍撤収を重要政策に掲げている。

五月に野田首相は米国訪問するようだが、何を語り合うのか。こちらに言うべきことを持つてなくてなにを話すのか。ご意見拝聴だけだったら訪問すべきではない。御用聞きの首相の米国詣ではまさに国辱である。オバマさんだってそんなのに付き合う暇ないよ。共和党に決定的な候補がいらないから、オバマ優位とみられているが、内実は相当に苦しいようだ。

野田首相はNHKの夜九時のニュース番組に出るなど勝負に出始めた感じだが、本当

に思っていること、やりたいことを国民に正々堂々と訴え、その結果、敗れば、静かに退場すればいいだろう。それ以外に道はないと覚悟すべきだ。

○海兵隊移転ついに動き出しましたね

(二〇一二年二月五日)

十三日が楽しみだ。ブルームバーグ通信の速報によれば、普天間海兵隊のグアム移転問題が大きくうごきそうだ。十三日の米国の予算発表の際に国防総省が明らかにするはずだが、現在8000人の海兵隊員のうち、グアムに4700人先行移転させ、あとはオーストラリア、フィリピン、ハワイにローテーション駐在させるという内容になりそうだ。その後岩国に海兵隊の司令部機能を移す話が出てきており、十三日にならないと全容はわからない。それでも1万人ほどの海兵隊員が普

天間にのこり、これが固定化されてはかなわない、というのが日本政府の態度、そして新聞論調だ。だけどここはひとまず、この動きに乗ってさらなる負担軽減を勝ち取るべく努力をすべきだろう。いずれにしても普天間の海兵隊が半減するチャンスを迎えたい。辺野古への移転が事実上無理だ、と判断しての米国側の政治的決断は正しい。

元駐日大使のアマコスト氏が指摘しているように米国は、これからの紛争に地上戦力を展開するのに非常に慎重にならざるを得ない。おっとり刀の海兵隊の出番は限りなく少なくなりそうだ。もっぱら海空戦力の展開中心になる。アメリカ映画「北京の55日」(義和団事件、北清事変)では、海兵隊が活躍し、地理的に近い旧日本軍の海兵隊ならぬ陸戦隊が大活躍しようだが、鳩山元首相の県外移転発言のとき、抑止力としての海兵隊がクロ

ーズアップされたが、どうやら化けの皮がはがれたようだ。当の米国自身が主として財政的な軍事費カットの必要性とこれ以上自国の若者の血を流せない、そしてアジア重視という観点から軍の再編成に踏み込んだが、今回の動きも明らかにこの流れに沿ったものだ。とうの昔に米国の議会はこうなるのを、いやこうすべきなのを見切っていた。米国は議会がしつかりしている国だということを改めて思い知らされた。

それにしてもわが日本の動きはまさに論評するのにも値しない感じ。政府、議会、メディア。押しなべてだめ。米側と交渉していたのなら政府はその辺のニュアンスが伝わるメッセージをなぜ発信しないのか。参院予算委員会でも依然として木で鼻を括った（くくった）答弁を外相、首相はくりかえしている。国権の最高機関である国会である程度のこと

を話さず、どこで話すのか。また、国会議員の方もつとつとなぜ突っ込まないのか。年間一人5000万円もの歳費が議員には支払われているのにこの体たらくでは。政府がものを言えないのは、著しく当事者能力に欠け、つまり交渉というよりは、米側の方針転換を拝聴する場になっているからだろう。かくして自分の国のことなのに「日米合意」を守らなければの一点張り、辺野古移設はだれが見てもありえないのにまだ辺野古、辺野古と呪文を唱え続ける始末だ。ほんとに始末に悪いよね。

○今度はイランですか？

(二〇一二年一月十三日)

イランの核開発を阻止しようと、アメリカが躍起となっている。イランと取引を続ける銀行に対して締め上げるといふわけだ。ガイ

トナー財務長官が今日十二日に中国からの帰路日本に立ち寄り、安住財務相にイランからの原油輸入をストップするように要請した。これに対し、安住財務相は、すぐにはできないが、段階的に減らしていくと要請に応える姿勢をみせた。

太平洋戦争、日米戦争はアメリカの日本に対する石油禁輸がとどめとなつて日本は戦争へと突っ走った。これは歴史的な事実である。他国に石油という命綱を断つことをそう簡単に強制していいものか。ヨーロッパも同調しているから、問題ないでしょう、といわんばかりの安住財務相には、がっかりだ。なにかガイトナーにたいしてへりくだつたように見える態度は情けない。少しは洩面を貫いたらどうか。

北朝鮮と中国で接触した中井議員の動きについて、藤村官房長官は一議員の活動にす

ぎない、と木で鼻をくくる言い方をするだけ。国民に対して政府の中枢にある人物の発言だろうか？目の前にいるメディアだけを意識して言質を取られまいとしているのだろうか、テレビ画面を通して多くの国民、有権者がどう思うか少しはかんがえてみたら。肝心のドジョウさんも発言内容になんのニュース性もない、空疎なものばかり。勘違いしているのではないか。情報をきちんと伝えるという作業が全くできていない。最近の民主党は！

それにしてもこのイランの石油問題にドジョウさんは、表に立つて意見を言うことはないようだ。いくら税制改革の道筋作りに手いっぱい、そのための内閣改造に心奪われているにしても。これでいいのだろうか？

○政治コントが出てくるのは、政治の

危険水域 (二〇一一年十二月二十二日)

今日十二月二十二日のミヤネヤで、ニュー
スパーの政治コントが登場。菅直人、鳩
山由紀夫、枝野、蓮舫そしてドジョウさんこ
と野田首相の物まねが番組をにぎわした。こ
の政治コントのニーズが発生するのは、なに
がしか政治がヤバイ局面に入ったことをうか
がわせる。年内に消費税の値上げの法案づく
りに突っ走りたい野田首相だが、果たして国
民にそれを支持する機運、気配、雰囲気醸
成されているだろうか。疑問である。消費税
の値上げは自民党与党時代から危険物として
取り扱われてきた。だからかなり準備不足で
この難題に手をつけた感が否めない。財務省
主導でことが進められているのでは、と疑わ
れるゆえんである。

国民は有権者はだれも一年ずつで首相が
変わることを望んではいない。国民にじっく
りと語りかけて欲しい。社会保障はこのよう

にするつもりだ。ついではその財源として消
費税のアップをお願いしたい、と率直に語り
かけて欲しい。

○金正日の肩書言えないの？

(二〇一一年十二月十九日)

揚げ足取りは品がよくない、と思うけど。
国会議員がああ金正日さんの肩書をいえない
のは、大変まずくないですか？今日夕方のニ
ュースで首相も出る予定の街頭演説で首相が
金さんの死去の報で来れない、と聴衆に説明
したのは蓮舫さんと一緒に車の檀上にいた近
藤洋介・衆院議員。金首相？、韓国の総理大
臣？とこの世界的な有名人、金正日・北朝鮮
総書記を取り違えてマイクでしゃべった。な
にか上がっていたのでしょうか。そういう状
況とも思えません。なにしろ北朝鮮人民か
らは「領導」様と呼ばれる人物。首相、総理

大臣、韓国などと口走ることは、信じられないことです。近藤議員は2009年の衆院選で山形2区から16万6000余票を得て選挙区では初めて当選した気鋭の議員とみられるだけに、愕然とする思いがいたします。

○グアム移転予算削除

(二〇一一年十二月十四日)

どう考えてもアメリカ上下両院の議会の方が、まっとうだと思う。普天間の米海兵隊のグアム移転の予算を全額削除した件である。オバマ大統領もこの削除案にサインせざるを得ない情勢だ。

発端は鳩山元首相の「県外移転」発言、もしくは主張だ。「海兵隊の抑止力はやはり必要」と鳩山さんはポシヤツテ、「宇宙人」のレッテルを貼られて表舞台から退場。しかし、これは仲井眞沖繩県知事の心に火をつけた。

これ以上沖縄の土地を、海を軍事基地として新たに提供するわけにはいかない。この信念は揺るぎそうもない。ということは、着工に不可欠な知事の埋め立て許可は出ず、辺野古の新基地建設は事実上、不可能だ。

日米の両政府は判で押したように、これまで通り辺野古移転を目指すというばかり。今回の米議会の決断の背景には当然、アメリカの財政の悪化がある。もう軍事力を海外に縦横に展開し、アメリカの presence を誇示するという従来型の政策はとれない、と米国の議会人は見切っているんだと思う。

十二月八日の朝日新聞の元駐日大使、アマコスト氏へのインタビュー。アマコスト氏は海兵隊の日本常駐は必要か、と率直に疑問を語っている。「米軍は原則として海・空の戦力にとどめ、陸上戦力は同盟各国が担うべきだと思う」と述べている。リビアの内乱のとき

戦闘に参加したのはフランスと英国だった。それも空爆だけ。クリントン国務長官のリビア訪問は大分たつてからだつた。さすがのアメリカも「boots on the ground」には慎重にならざるを得ない。もつとも今日、十二月十四日には今度はイランに対する経済的な制裁を世界に呼びかけており、この問題は経済的には各国に大きな影響を及ぼしそうだ。米議会上院軍事委員会のマケイン筆頭理事（共和党）が言う通り「現行の米軍再編計画は一呼吸置いて、今後どう進めるのが一番いいか早急に検討する必要がある」のではないか。

アメリカでこれだけこの問題の雲行きが怪しくなっているのに日本の国会、メディアの反応は鈍すぎないか。朝日新聞の十二月十四日2面によると、800億円ものグアム移転費が我々の税金で肩代わりされているが、

ほとんど工事に使われていないそう。もうこのグアム移転話をおしやかにして別の勇断を下すべきではないか。あくまで辺野古移転を唱えるだけでは、あまりにも無能で、誠実でない。沖縄に対して、日本に対して。

○ウォール街とインサイド・ジョブ

(二〇一一年一〇月十四日)

今年五月に新宿の映画館で「インサイド・ジョブ」という映画を観ました。世界を席巻したリーマンショックの実相を暴いたもので、チャールズ・ファアガソン監督のドキュメント。インタビューに次ぐインタビューで構成された映画でした。要するにウォール街、連邦政府、ハーバード、コロンビアと言った超一流の学問の府の学者連中が結託したほとんど犯罪に近い詐欺事件だ、とリーマンショックを断じています。

80年代以降急速に製造業が凋落、金融工学に活路を見出したアメリカ。「技術者は橋などを造るが、金融工学の技術者は夢を造る。

ただ、それがいい夢ではなく、nightmare（悪夢）だった」というセリフが印象的でした。

リーマンなどの犯罪的詐欺師たちは、超高額の退職金をつかんでしばし、表舞台から身を隠しただけ。政策責任者のFRB（連邦準備制度理事会）のバーナンキ、前任のグリーンズパン、財務長官のガイトナー、前任のポールソンらは繰り返し「何か手を打つべきだ」と指摘されながら結果的にはなにもしなかった。いまも何もできずにいる。オバマ大統領も政治的背景にはウォール街が存在しているので、何もできないだろうと指摘している。

9%台の失業率という氷河期に捨て置かれた若者たちが、アメリカの現実を目を覚ましたので、今回のウォール街のデモになったので

はないでしょうか。デモは今後どう展開するかわかりませんが、単なる若者のガス抜きですむ話でないことは確かでしょう。基軸通貨の地位が怪しくなりつつあるドル。アメリカ帝国が音を立てて崩れ始めたのかもしれない。我が国はこのようなアメリカを冷静に見詰め、金融・財政政策、安全保障政策について根源的な議論を積み重ねていくべきです。

震災さえやっておけばいいや、というような話ではないのです。当時、閣僚だった与謝野馨氏がこの映画を観にきていました。少しは政策に反映されるのでしょうか。TVニュースで、「職がなく、虫歯の治療ができない」と訴えていたアメリカの若い女性は、決して赤の他人ではなく、すぐ隣にいる仲間なのです。

（この原稿は、「炬ばたセイ談」第7号に掲載された「インサイド・ジョブ」とかなり重複します。）

（元KKK専務）

もどぎ雑考

入来院重朝



政治生命という言葉を最近よく耳にします。つまり耳新しいのです。政治に生命があるかの如くであり、そもそも現下の政治をとことん考察していかない小生にとって、特定の人物が気易く口にするのをみると、ますますその言葉がフワフワとそこらを浮遊するかのようであります。我が国には昔より言霊という云い方があります。言葉は我々日本人にとつて軽々に用うべきではないという思いがこもっています。

さて我が国の風潮は、マッカーサー憲法がその見本である実体のない空々しい文云が我が日本人の日常即言論の主流となつて現在に

至つていることをしみじみと思ひます。

要するに日本語は新しいイミを持ち始めたのであります。その風潮と軌を一にして我々日本人の顔が一変したのであります。そのわかり易い見本は現下の野田内閣の面々をこちらになれば一目瞭然であります。

一見丁寧な言葉づかいが、まるでロボットのおしゃべりの如くであり、聞き手に何ら新鮮な感銘を残さないその完璧さにほとほと感心する御仁が我が国の総理大臣であります。思えば総理になりたいと、自らドジョウとわけのわからないことを云つてみんなをケムにまいたつもりかどうかもよくわからない野田総理であります。三年前戦後はじめて政権交替で政権についた民主党の三人目の首相として世界にお目見えした実に戦後六十五年たつて生まれた日本人の顔であります。何の陰影もない、実にノツペラのただ酒やけでつやつ

やして、よく太った小父さん、それも人のよさそうなどこか商店街の顔役ピッタリの彼が今や日本国の総理であり、それが日本国の現実であり、我が日本人の合わせ鏡で見る我々自身であります。つまり我が国からサムライがいなくなつたとかつて私は云いましたが、今は我が国にはオトコが不在であるというのが正しいと考えています。そのことはここ数年ますます顕著になつたと思いませんか。

生き生きと実に顕著に実力を發揮しているのは我が国においてほとんど女性であります。それは良きにつけ悪きにつけ女性こそが我が国の実体を支えリードしています。オンナは生まれた時から死ぬまでに完全にオンナであります。つまり性染色体がX・Xであり安定しています。オトコはX・Yの構成で不安定です。理屈はどうでも、そのことは古来よりオトコは弱いものとして世間はわかつていま

したから、強いオンナ人間社会の継続に最も大事なオンナを守らせるために育てるのが大人の責務でした。つまりオトコはほつたらかせておけば何の役にも立たない無駄飯喰いであり、マサにそれは許されないのです。

さて我が国には今やオトコもどきしかいないのでありますが、なぜそうなつたかははっきりしていません。

戦後、即ち敗戦以来マッカーサーは我が日本人が蘇らないように巧妙な手を打ちました。それも実に簡単な手であります。つまり「教育勅語」の発禁であり、オトコがオトコになる通過儀礼としての兵役の廃止です。つまりこのことは我が日本国はアメリカの属国としては国もどきであり、そこでのオトコはオトコもどきにならざるを得ません。ただし我が自衛隊、これも軍隊もどきであるにせよ、辛うじて日本男子の面魂を守ってくれたと、

三・一一以来明らかになりました。

さて日本の特徴はオトコ不在ながら何とか国柄を維持していることでありますが、もともと国柄自体がたおやかさでありますから不思議でもないことです。

今や世界はカネ・ヒト・モノが一体化しつつあり国同士の戦争も仲々しづらくなりつつあります。しかし戦争は人類の宿痾であり、人口の爆発的過剰は何時戦争を誘発するか予断を許しません。

しかし先進国は今やことごとく二〇年遅れて日本化しつつあり、なでしこ日本は今や先進国のモデルとなりつつあります。つまり日本もどきが先進国の行く着く先ということですから。このことを考えると世界からだんだんオトコがいなくなりつつあるのかも知れませんが、そう考えると今年の世界の主要国のトップが交替するようですが、いっそドイツの首相

メルケル女史にあやかっで一斉に女性がトップになれば良いと私は思います。オトコらしい首相は今や望むべくもありません。イギリスのエリザベス女王六十年の治世は 思えば今世紀の華でありました。

(炬ばたセイ談庵主)



アンゲラ・メルケル (wikipedia より)

時の過ぎ行くままに (2)



なにもそこままで—ガキじゃあるまいし

桐野 三郎

※ ぼくらはお化けにはなれない

身内の法要のために出かけた西本願寺（鹿児島市）でのお坊さんの講話が出だしから面白かった。

電車を待つ駅のホームで、後方でおしゃべりに夢中な熟年女性数人の会話がイヤでも耳にはいつてくる。久しぶりの同窓会の帰りでもあったのか「いつまでも若く」とか「いつまでもお元気で—」なんて言葉を繰り返して言い合っている。たまりかねたそのお坊さんの口を突いて出て来た呟きが「あんたたちは

お化けかよ！」だったと。

人間なら誰だっていつかは老いぼれもするし死期も訪れる。それを「いつまでも若く」とか「いつまでも元気で」とは虫の良すぎる話、そんなやつがいるとしたら「お化け」でしかないよ—というわけだ。

世はいよいよ高齢化社会。そのせいかいわるる生病死の生、病だけではなく「老」や「死」に関する情報がやたらと氾濫するようになった。若返りの秘訣から理想的な死に方、はては死んだ後の葬儀のあり方まで。いやはや、人間この世にオサラバするだけのために、はそこまで考えなければならぬのだろうか、昭和ひとけた生まれのぼくなど何か急ぎ立てられているようでだんだん不愉快になってくる。アンチエイジングだのエンディングノートだのしたり顔の横文字が目につきはじめたと思っていたら、ついに「エンディング

グノートの書き方」という指南書まで現れたらしい。情報化社会もついにそこまで来たかと呆れるが、もちろんぼくはそこまでご教示いただくつもりはない。ぼくの頭の中にはいまでも昔の爺さんたちの口ぐせがしっかりとインプットされている。

「うんにや心配することなど何もなか。まだこの世で死に損なつた人間なんど一人も居りやせんのだから」

そうそう、ぼくらは所詮お化けにはなれないのだ。

※ 鹿鳴山の墓標



三年前、加治木町の鹿鳴山転法輪寺の境内に桜の木を一本植えさせていただいた。転法輪寺は開山してまだ五年。そのころは広大な敷地に空き地がいくらでも残っていた。

「桜の木を一本植えさせてくださいよ」というぼくの申し出に「はいはい、お好きな所にどうぞ」というご住職・松元優樹和尚の快諾を得て、ぼくが選んだのは境内の中で一番見晴らしのいい小高い場所、植えたのは樹高三メートル七十センチ、幹の直径はわずか五センチぐらいのソメイヨシノの幼木だが、それでも樹齢七年ということだった。その春の甲突川べりの木市で一万八千円、軽トラックで運んできての植え付け手数料二千元を入れて計二万円である。だが、というこの桜も、実は家内の友人とも子さんのプレゼントだったから実際の出費はゼロだった。

とも子さんは三年前の春九十二歳の母上の最期を三船病院で看取つたのだが、長期間世話になったお礼として病院に桜の木を贈ることにし、それを見立てるためにぼくの家内を木市に誘つたという次第。家内も母上ご存命

中に見舞に出かけたりして三船病院の様子を多少なりとも心得ていたせいもある。その二人が木市にでかけたのだ。

「実はうちの主人も墓不要論者で墓の代わりに桜の木を一本植えるだけでいい——なんて言っているのよ」と、つい家内が口を滑らせてしまったらしい。当然のことのように「それなら今日、その桜も一緒に選びましょうよ、私にプレゼントさせて」という流れになってしまったのだという。そうなのだ。松元和尚には特に断りはしてないが、ぼくには最初からあの桜は自分の墓標のつもりで植えさせてもらったのである。「自分の墓をどうするか——」という厄介な懸案事項が思いも寄らぬ自然な流れで解決されてゆく、そんな満足感を密かに味わいながら――。

転法輪寺の頭には「鹿鳴山」という呼称がついているがこれは誇張ではなく、裏山から

はたまに鹿が顔をのぞかせ、ときには鳴き声が聞こえたりするから付けられた名だという。高速道路からは田んぼを隔てて直線距離にすればわずか二百メートルしか離れていないのに、裏山はやがて県民の森公園に向かって連なっていくという閑静な佇まいが魅力だ。その敷地の最高のポイントに植えた桜。通年では樹齢も十年だけに幹周りもがっしりと逞しくなってきた。この春咲いてくれた花はまだまだ申し分程度で絢爛たる風情には程遠かったが、植木屋の説明では桜は二十年も経てば結構な大木に成長すると云うことだった。ということとはあと十年、あわよくばぼくは生きていくうちに己の墓標となる桜の咲き誇るさまを眺めることができるのではないのだろうか。フフフ、あの高速道を走るたびに見える、緑豊かな加治木の山々をバックに転法輪寺の境内にぱっと明るく咲いているぼくの墓

標、ちよつとした（絵になる風景）ではないか。ぼくはもう、そう言いたい気分になってきている。

※ 透明な水の底の骨たち

桐野家の墓は唐湊（鹿児島市）にある。錦江湾を見おろす高台の眺望にひかれて六十年前に父が川辺町から移設して建て替えた墓だ。納骨堂は地下式で、納骨する場合など漆喰で塗り固められた墓前の大きな台石をずらして窮屈な階段を降りるのだが、いま中の棚には七個の骨壺が並んでいる。川辺から持って来た骨をまとめた大きな壺のほかは、父母と兄たち、それに早逝した妹の分などである。墓の中は湿気が多い。湿気は水滴となつて白い骨壺の中に溜まる。だから骨たちは骨壺の中の透明な水の底にひんやりと沈んでいる。もちろん納骨が行われる度に全ての骨壺の水

は丁寧に除去するのだが、次の納骨のころには間違いなくまた冷たい水の底。何度もあの納骨堂に入ったことのあるぼくは水の底に眠り続ける骨を見るたびに、懐かしさのあとに一抔の（佻しき）とでもいうような後味を味わうものだった。ぼくが「散骨派」になつたのはそのせいである。

しかしこれも、わが家の墓の維持管理はもうすべて死んだ長兄の家系に委ねてあるという、三男坊の気楽さから言えることだろうが。

※ 主観と客観は別物

「戒名不要、葬式無用」と言い遺して逝つたのはたしか白州次郎、「マツカーサーを叱りとばした男」などと呼ばれただけにカッコいい。



という彼を気取るつもりは毛頭ないが、ぼくも正直にいえば葬式だの墓だのの事を真剣に考えたことはまだ一度もない。後期高齢者などとひと括りにされるようになったところから、「私たちのお墓はどうするつもり？」なんて言葉をわが家でも聞くようになり、「面倒くささもあつて「桜を一本植えるだけでいいさ」とこたえていたのだが、何回かそう言っているうちに自分でもそれでたくさんだ——と考えるようになったというだけの話。そもそも、人間が自分自身に責任を持たなければならぬのは死の瞬間までではないのか？ 死んだ人間の始末をどうするかは遺された者たちの役割のほうで、それを次から次に繰り返してきたのが人類の歴史だろう。もちろんぼくの墓だって、たとえばぼくの倅たちがどうしても豪勢なやつを建てたいというなら大いに結構、勝手にそうしてくれればいい。もち

ろん、彼らにそんな甲斐性があればの話だ。

いまぼくの頭の中は「残された人生をどう生き切るか」を考えるだけで忙しく、死後のことを考える余裕などまったくない。いや「ない」というより「もつたない」といったほうがいいだろう。大げさに聞こえるかもしれないが、ぼくがもう永いこと「俺たちにまさかこんなすばらしい人生が残されていようとは夢にも思わなかった」という実感を持ち続けて生きてきたことも事実なら、いまからさらに人生の佳境に入りつつあると本気で思っていることも嘘ではない。もちろん順境に恵まれ続けたなんて意味とはまったく違う。挫折や失敗ばかりかクモ膜下出血とか大腸ガンなどという大病も人並みに経験してきている。身内はもちろん友人知己から見たらむしろアップアップでなんとか生き延びてきたただの老人でしかないだろう。だが、そこは俗にい

う主観と客観の違い、天と地ほどの差があるのだ。当人にとつてはそのアップアップさえも通り過ぎてしまえば貴重な人生の彩（いろいろ）のように思えてくるのである。

そうそう、この号の冒頭で昭和ひとけた生まれと書いたからすでに気づかれた方も多いだろうが、ぼくたちは二十歳そこそこで敵陣に突つこんで戦死しなければならぬであろう運命を、いちどは覚悟しなければならぬかつた世代。それを間一髪、突然の終戦で救われたばかりか以来六十七年もの平和な時代を生きてこられたのだ。それだけでも奇跡的な幸運に恵まれたといつてもいい。TVドラマの言葉を借りるなら「生きちよるだけで丸儲け」、人生が楽しくないはずはないだろう。その上、いまこの紙面を借りてたわいのない墓碑の自慢話など書いているのだ。ぼくらよりほんの数年前に生まれたばかりにあたら若い

命を戦場に散らさなければならなかった先輩たちを思えば、われながらなんとゼイタクないま（現在）を生きていることかーと、いまさらのように思えてくるのである。

※ トンネルを抜け出した夏

白いチョークで黒板に人生（という文字）を書くとするれば、黒板の地色が深くて濃いほどチョークの白はくつきりと鮮やかに浮かび上がって来るのではないだろうか。

ぼくが生まれた年（昭和六年）に満州事変が始まり、小学校に入る前年に日中戦争、小4で太平洋戦争に突入、中2で終戦—である。小学生時代はご多聞にもれずぼくも純粋培養された軍国少年だったが、中学校に入つてからは軍事教練に明け暮れながらも日々に濃くなつていく日本の敗色を知るにつれ、自分の



死を考えるような懷疑派になっていた。さらに昭和二十年の春から終戦までは繰り返される米軍の爆撃で鹿児島市のほとんどが焦土と化し、本土決戦も間近という悲壮な空気さえ流れはじめる。その緊迫した空気の中で、ぼくは夜な夜な思春期の真つただ中に死んでゆかなければならない自分の運命を考え続けていた。誇張ではない。ぼくが自分の生や死について、最も真剣に考え続けたのは十三歳のあの夏だ。しかし、本土決戦の結末は「一億総玉砕」しかないと思ひこまされていた。ぼくらにとつてはまさに晴天の霹靂、戦争はあつけなく思いも寄らぬ無条件降伏で幕を閉じた。終戦の玉音放送を聞いた八月十五日の正午には大人たちのざわめきの中で、ぼくらにはまだ状況が掴めなかった。「でも、ひよつとするとこれで俺たちは死なずに済むのではないだろうか」という口にすることははばから

れる嬉しさが、じわじわと心の底から湧き出してきはじめたのは何時間か経つてからだつた。あの日の午後、徐々に昂つていった胸の鼓動はいまだでもはつきりと思ひ出すことができる。目に入るものすべてが、生き生きと輝きを取り戻してくるようだった。

鹿児島に進駐してきた千名の米占領軍が宿舎として選んだのがぼくらの中学校だった。学校を追い出されて伊敷にあった陸軍の兵営跡にぼくらの移転が完了するまでの間、十月中旬から十一月にかけてだったと思うが二十日間ぐらい、学校は米兵たちとぼくらの共用という時期があつた。聞くとは大違い、現れる前の噂では最も残忍な海兵隊らしいという触れ込みだったのに、目の前に現れたのは明るく陽気なただの若きヤンキーたち、またたく間に生徒たちと打ち解けていった。彼らが上半身裸になつて汗をかきかきまっ

先に始めた作業といえは校庭に延々と一直線に長い穴を掘ることだったが、それが何のためかのであるかを知ったとき生徒たちの驚きは大きかった。ほんの一兩日後その穴の上に建ったのはなんと一列に並んだ彼らのトイレ、いや、トイレといっても腰掛けと天井がある以外には腰の部分をわずか一メートル位の幅で囲ってあるだけ、あとは金網張りという透け透けの簡易型だ。屋上からのぞけば遠目ながら彼らの大便スタイルは丸見えだった。彼らは和式のトイレが使えないのだということを知った新鮮な驚きもあつて、生徒たちは移転作業の合間を縫ってはわれ先に屋上に上り、彼らの白い尻が見えたといつては笑いこぼげた。あの秋、ぼくたちは長い長いトンネルをやつと抜け出したとでもいうような、底抜きの明るさの中にいた。

※ ハバロフスクの秋

太平洋戦争で失われた犠牲者の数はおよそ三百万人、北はシベリアから南の島々に至るまで、まだ遺骨も収集されなのまま放置されている英霊も数知れないという。

ロシアはハバロフスク市郊外の日本人墓地で举行された二十年前の「日・ロ戦没者慰霊の夕べ」にぼくが参加したのは、最福寺（鹿児島市）の池口恵観法主ご一行にお供させていただいたでだった。十月のハバロフスクは肌寒く白樺林に囲まれた日本人墓地は黄葉に包まれていた。ロシア正教大司教以下も参加されての荘厳な式典や、林中に響きわたる読経の中に高々と燃え上った池口大阿闍梨の焚かれる護摩供養の火柱も忘れ難い記憶だが、ぼくの網膜の底にはいまひとつの光景がくつきりと焼きついている。



長い式典が終つて、日・ロの数百人はいたであろう参列者がほとんど引き揚げたあとを後尾にいたぼくが振り返ったとき、墓石のひとつをかき抱いて人目もはばからず慟哭を続ける老婦人の姿があつたのだ。墓といつても誰のものとも分らない黒々とした四角の扁平な石が点々と埋めこめれているだけである。だが、誰のものとも知れない墓石をかき抱かずにはいられない積年の思いが彼女にはあつたのだろう。ぼくもこみあげてくるものを怖えるために思わず上を見上げたのだが、彼女の鳴き声が悲しい笛のように響きわたる日本人墓地の上に、白樺ははらはらと黄葉を降らせ続けていた。

※ アムール川に流れていた詩吟

慰霊祭の翌日はアムール川の遊覧船を楽しみ組に入れてもらった。遊覧船といつても口



シア側に沿つてあの大河を何時間か上り下りするだけで、広大な中州は見えても対岸の中国側が見えるような航程ではない。真冬には一〇トントラックも渡れるような氷が張りつめるというアムール川も、十月の表情は穏やかだった。

それでも甲板に上つて川風に吹かれながら広漠たる風景を眺めていると、やはりこの風景の中で痛恨の最後を迎えなければならなかつた先人たちの無念に思いは至る。その屍はまだ幾柱もこの川底に眠り続けているのだろうか―などと。

その船尾から、詩吟の声がかすかに聞こえてくるのにぼくが気付いたのは、クルーズも終わりに近づいてからだつた。とんとんとんとんというエンジン音に混じつて流れるその声は、最初はスピーカーから流れる船内放送かと思つたが、音に近づいてみて船尾にひと

り立つ人影に気づいた。冷気を避けてほとんどの客はもう船内に入り、誰もいない船尾から川面に向かって詩を吟じている姿は、コートを羽織った婦人だがどこか端然としていて近寄り難い。ぼくは邪魔にならないように少し離れた柱の影で聴き入った。

さんせんそうもくうたごうりよう

山川草木轉荒涼 十里風腥さし

しんせんじよう
新戦場・・・

ぼくも小学生時代に学舎に通ったことがあるだけに詩吟は懐しい。それにしても絶えて久しく吟じたことのない詩を、まさか半世紀後のアムール川の船上で聴こうとは。

「すばらしい詩吟を拝聴させていただきました」とその婦人にぼくが挨拶したのは、夕方ホテルのロビーで姿を見かけたときだ。香川県から参加したという彼女に詩吟を教え

たくれたのは、シベリアに抑留されたまま遂に帰還することのなかった父上だという。故郷を出発するときから、アムール川で詩を吟じようと心に決めてきたらしい。

「今日は五吟いたしました。でも聴いてくださる方がいらしたとは嬉しい。長年の心のしこりが取れたような気が致します」と、晴れやかな笑顔を見せていた。

※ 思川の水鳥たち



始良市に住むぼくは夜明けに思川流域を歩くのが日課だ。その途上では「地球」というこのホシ(惑星)に生まれた俺たちはなんと幸せなことか」と思うような美しい光景に出くわすことがよくある。そしてその度に「年甲斐もなく子供じみた感情をまたー」なんて苦笑したりもしているのだが。

でも人は皆、同じ風景や光景を見ているも心の網膜に投影している美醜は月とスッポンほどの相違があつたりするのではないだろうか。カメラで写す写真だつてアングルや印画紙が違えばまったく異なる画面になるようにだ。その点、ぼくらは（すくなくともぼくは）あの十三歳の夏以降、「生きていることすばらしさを実感しながら生きてこられた」という意味で、誰よりも美しい風景を見ているのかも知れない。ふと、そんな自己陶醉に浸りながら歩いている自分に気付くことさえあるのだ。「比べるべき不幸な時代を知っている幸せな世代」とでもいうべきだろうか。でもぼくたちがそうなら、いまの時代には「幸せな時代に気付かない不幸な世代」と呼ばれてもしかたのない若者が多いのかもしれない。

思川で遊ぶ水鳥は多い。この地に住みつい

ている鳥の種類も多いが、ことに河口から海辺にかけては季節によつて北から南から、国境などという愚かな人為の境界など造作もなく超えて飛来する水鳥たちが無心に群れ遊ぶ。当然のことのようにぼくの脳裏にはアムール川や日本人墓地の光景が蘇える。そこでまた、ぼくの目に映る光景は愛しさを増していくのである。



※ ぼくのエンディングノート

あの戦争が終わつて六十七年。こんなにも続く平和を満喫しながら生きてこられたのだ。そんな自覚が背景にあるからだろうが昏迷を続ける日本政治の現状なども、誤解を恐れずぼくらに言わせてもらえばまだまだ「コップの中の嵐」。それだけに同世代の残党が集まる酒席では口角泡を飛ばしてのいわゆる天下国

家論になりやすいのは相変わらずながら、ケ
ンカ腰になるよりはむしろ「楽しむ」という
傾向が強くなってきた。

始良市に移り住んで九年になる。天文館で
飲んでも終電は深夜までであるという足の便も
だが、すぐ目の前を流れる溪流に螢が舞うと
いう自然いっぱい環境が有り難い。しかし
さらに嬉しいハプニングが訪れたのが五年前
の転法輪寺の開山だった。和尚の松元優樹先
生は最福寺の池口恵観法主の高弟として長年
同寺で修業を積まれた知る人ぞ知る阿闍梨。
ハバロフスクはもちろんその後、池口法主が
ローマ法王ヨハネパウロ二世に謁見されたと
きもバチカン宮殿にまで引率いただくなど
も数十年にわたる深いご縁をいただいていた。
年齢はぼくの息子といってもいいぐらいだが、
何かにつけて気楽に相談に乗っていただけ
得難き師である。その先生がまた同じ市内の

加治木町に開山されたばかりか、その境内に
桜まで植えさせていただいていた。ぼくは・・・

さて、ところでぼくは長々と何を書こうと
しているのか。そうそう、一言でいえば「エ
ンディングノートの書き方」という平和ボケ
したような表題の語感にひっかかり、ちよっ
といちやもんをつけてみたくなったというの
が正直だろう。

もちろんこの本を読んでもみないで言うの
もおかしいが、きつと時宜を得た有用な本だ
ろうしそれを読む人とやかく言うつもりも
まったくない。だが、「エンディングノート」
という言葉聞いてぼくはまっ先に思い浮か
べるのはやはりあの戦争で、死地に赴く前夜
に特攻兵たちが書き残していったたつた数行
の遺書(というエンディングノート)なのだ。
悲壮な彼らの胸中を思えばぼくたちのように
「なにそこまで」教わらなくとも、いやもつ

と率直にいえば「ガキじゃあるまいし」とま
で皮肉りたくなる、そんな世代もあるのだ―
ということぐらいは言っておきたかったとい
うわけである。

実をいうとぼくには古くから、子供たちと
固い約束を交わしていることが一つある。彼
らの子供たち（つまりぼくの孫たち）が思春
期に入るころには必ず一度は知覧の特攻記念
館を見学させること―をだ。狙いはもちろん
孫たちに「いま（現在）ある幸わせに気付か
ない愚か者」にだけはなつて欲しくないから
である。そしてその約束だけでぼくはもうエ
ンディングノートなるもののは半は書き終わ
ったつもりでいるのだ。もちろん最後に書く
べき一、二行はまだ残っているのだろうが、
それを考えるにはぼくはまだ若すぎるだろう。

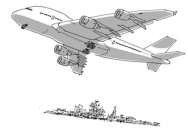
（エッセイスト）



左奥から流れるウスリー川と中央奥から流れるアムール川が合流する地点
(Wikipedia より)

南米の旅

江藤 ヤエ子



リオのカーニバルを見ようと、千葉の友人に誘われて二月下旬、南米に行った。八日間ツアーだが、前後二日は、アメリカ経由の移動日になり、見学は四日間である。ニューヨーク経由でサンパウロに着いた。ブラジル側のホテルに泊まったので、イグアスの滝を見るためには、アルゼンチンに入国してから、軽便列車で滝の近くまで行った。

ブラジルは三回目なので、前に来た時も滝は見ているのだが、アルゼンチン側からは初めてだった。水量も多く滝もあちこちにあり、写真を撮すのに大変だった。

昼食後は、ブラジル側を歩いて滝を眺めた。私は、前の記憶と違うので、ガイドに尋ねると、十年程前に道路も整備してコースも違うとのこととで納得した。オプショナルでは百三十ドルで、ボートで滝壺まで入るツアーがあったが、私は参加しなかった。行った人の話しでは、本当に滝壺の下までボートが入ったので、濡れたそうだと水着で行くと書いてあった訳が判った。歩いている時、「鼻熊」という栗鼠より少し大きい動物も見た。長い尻尾があり、茶入りの縞になっていた。

翌日九時発で、ブラジル、アルゼンチン、パラグアイの三国国境地帯に行った。其処には下が黄色で上が緑色の塔が建ててあった。また滝から流れる川に架けてある橋の欄干も三国に色分けしてあった。黄色・緑・空色と白の縞とである。国旗の色だそうだと。

イグアス空港で日本食の弁当が配られた。昼



イグアスの滝を背に著者（左）と友人

過ぎの飛行機でサンパウロに向かう。機内でもサンドイッチが配られたので、お腹一杯になった。飛行機を乗り継いで、リオデジヤネイロに移動してホテルに泊まる。

翌朝は六時朝食でホテル発七時。丘の上に立つキリスト像で有名なコルコバードの丘に行く。前の時にはバスで上ったことを思い出した。現在は電車もあり時間も早く到着できた。丘を下りて、メトロポリタン大聖堂も見学した。信心深くないので、入口から覗くだけである。奥の祭壇まで見学する方もいた。

昼食は、ブラジル名物のシユラスコを食べた。バーベキユーで、串に刺した肉などを、ウェイターが持つて来る。大きな塊の肉を削ぎ切りにして配って歩いていた。奥の棚にはお寿司や刺身もあつたので、取つてきて食べた。日本人が多いので、刺身などの生ものを置いてあるようである。デザートは無いのではと思つていたら、アイスクリームが来た。

夕方まで、ホテルで休憩をして、リオのカリーニバルの鑑賞に行く。サンポドロモの特別観覧席で、カーニバルの行進を見た。今夜が最終の行進だそうで行進している人たちも観客に自分の帽子を投げた

り、身に付けている物を手渡して行くこともあり、私たちは、そうして貰えた物を交替で身に付けて写真を写して楽しんだ。

行列は初日に採点されたそうで、点数の低いものから順に行進がなされていた。マイクで出し物の説明があるのだが、語学力のない私はチンプンカンプンである。それでもながめていると、一番先に出てきた物よりも二番目のものの方が、少し豪華になっているとわかった。電気が点灯したり、歩いている人の服装も派手になってくるのだった。毎年、カーニバルのために、お金をかけているようで、大変だろうと感心した。それぞれのチームの個性もあり、日本人のグループが通った時には、私達の前では絵日傘を開いて歩く女性たちがいたし、後方の男性たちは、紋付袴姿で扇子も持っていた。最後まで見ていると、帰りが明け方になるということで、私たちは、一番上等のものは見ないでホテルに戻った。

翌日は、昼からポン・デ・アスカー（砂糖・パンの山）に行く。ケーブルカーで登り、コパカバーナビーチやいまねまビーチを眺めた。暑い日で、海辺ではビーチパラソルが並び、泳いでいる人た



リオのカーニバル

ちの姿が見えた。前に来た時には、ビーチの前のホテルに泊まっていた、海岸を散歩しようと思っていたら、歩道をジョギングしている男性は、拘りに早変わりする人もいたので、バックは前に持って歩いて下さいと注意されたことがあった。

今回のツアーには八十名の参加があり、二班に分けてあった。昨年は百二十人で三班に分けてあったそうだから、リオのカーニバルの希望者が多いのだと思った。私も定年までは二月の下旬には休みが貰えなかったから、どうしても冬休みに出かけたのである。

一回目のブラジルでは、アマゾン川で船に乗り正月を迎えたことがあった。沖縄から移民で来たという男性がガイドで、故郷の種籾を送って貰って出来たもち米で搗いたという雑煮を御馳走して下さった。知人の食堂で出された雑煮は美味しかったが、お椀ではなくて井に入れて出された。ああ、お椀など無いのだと淋しく思ったことである。

成田に着いてから、カーニバル見学の証明書を買った。念願のカーニバルを鑑賞することが出来て満足した。これからも、見たい物や行って見たい所を元気なうちに歩き回りたいと思っている。

(エッセイスト)



リオのキリスト像（コルコバードの丘）



根を養えば自ずから幹育つ



宮下 亮善

「二つ子の魂百まで」、最近聞かれなくなつた諺ですが、世の中がどんなに変化しようが、文明の利器がどんなに進んでも、人間の本質が変わるものではない。何故なら、人間の肉体と、それを意図する意識の上に成り立っている人間の本質である「性」が存在する限り、根本的に人間は変わらない生き物だということを知るべきです。言い換えるならば、その生殖本能において、なら動物と変わらないものだと云うことです。あの吉田松陰先生の松下村塾『士規七則』に、「人間およそ禽獣と異なる所以を知れ」とあります。所謂『騷』

の本質は、この一点にあるわけで、人間を動物にはならないのです。まさに『騷』とは、人としての身だしなみを整えることであつて、身辺を着飾ることではないのです。狼の育てた人間の赤子は狼のしぐさをするたえであります。

いづぞえ、先生方の教育研究大会に呼ばれて講演をさせていただきました。そのおり、先生方にこのような質問をしました。「先生方は酒を飲みますか、煙草を吸いますか」と、ただしましたが、誰も反応がありません。さらに「酒は親が飲めとすすめましたか、煙草は学校の先生がすすめましたか」と、お尋ねしましたが、これにも反応がありません。本質を問われているわけですので、反論ができないわけです。本質的に生身の肉体を持つ人間というのは「楽」をしたい、「美味しい」ものを食べたいという本能をうまれながらに持ち



門前に立つ阿形金剛力士像

合わせているものであれば、それこそ、「悪いこと《欲望》は誰が教えなくとも、覚えるものだ」ということなのです。本能のおもむくままに行動することにおいて、なんら動物と変わらないものなのです。

ある産婦人科の先生より、このような電話がかかりました。「和尚、この子の根性を直してくれ」「どんな子供な」「妊娠八ヶ月だ」「先生、そんな子は預かることはできません。山

奥の寺で、もし産気づいたら責任はもてません」「それでも良いから、是非預かってくれ」「先生がそこまで云われるのであれば、解りました」と、このようなわけで、この子と二ヶ月寝食をともにしましたが、食事は、犬食い、朝夕の挨拶なし、箸の持ち方、茶碗の持ち方、まるで三ツ子に接するような日々でしたが、この子の職業は皆さん何だと思えますか、幼稚園の先生でした。大学を出て立派な資格を取っても、これでは先が思いやられませぬ。しかしながら、妊娠する術は教えられなくとも知っているのです。何故なら、それが本能だからです。

永年、いろいろな子供たちと寝食を共にして来た、その一端を紹介しましたが、何故これ程までに『躰』が軽んじられてきたのでしょうか考えてみました。いろいろな原因が多々あるうかと思えますか、私は一つの大き

な原因は食事時の「テレビ」が大きく影響を与えていると考えております。「命」をいただいているのか、「物」を食べているのか、その本質的な意味を学ぶべき食卓が「テレビ」に害されているということです。この自然の摂理のなかで、何らかの他の命を食することに、ここに人間が存在し、いろいろな社会生活が成り立っているのであれば、食（農）は文明の母であるといえます。であればこそ、感謝や知足、恩に報いる心を食卓の場がまさに、人間教育の生きた現場でなければなりません。今日の我が国の諸悪の根源は「テレビ」であると云ったら言い過ぎでしょうか、人間というものは、良しにつけ悪しきにつけ、心にも身体にも「癖」が付くものなのです。生活習慣病とは、心生活習慣病でもあるわけです。そこで、食事の時は『食ON、スイッチOFF』運動を提唱しております。

森信三先生の説かれている『姿勢△形・型を整え、腰骨を立てる』とは、まさに人間を人間たらしめる基本であると解されるわけであり、『挨拶をしつかり、返事をしつかり、



宿泊研修中の坐禅（南泉院・啐啄精舎）

履物をしつかり整える』とは、まさに「品格の土台」づくりであり、自制心と他者をおもいやる心《忍耐》、命を粗末にしない感謝と報恩《質素》、人としての身だしなみを整える《礼儀》は、その本質において「不易」ということとあります。

私が、食作法にこだわることの真の意味は、まさに人が人として生きてゆく根源が食卓の場にあるということであり、親子という家族が国家や社会の基盤であれば、そこで培われた品格は国家や社会の品格をもつくるという意味において大変重要なことであるとおもっています。

人が人として「あるべきよう」であれば、国家も社会も「あるべきように」治まるものでしょう。

人間が成長するための『最高の条件』は、『最適な条件』と同じではないという、生物

学的見地から見なければなりません。人間も自然の一員であれば、たゆまざる手入れが大切なのです。水が過ぎれば根が腐り、手を抜けば枯れてしまう道理です。

寺子屋『啐啄塾』塾長
南泉院住職 宮下亮善



南泉院の不動明王

庄内憧憬

下土橋 渡



東北山形は、鹿児島から遠く離れていながら、鹿児島とは何かと縁の深いところである。

鹿児島市に本店を置く宝暦元年（一七五一年）創業の百貨店「山形屋」は、当時、商人の誘致策を展開していた薩摩藩に招聘されて山形県庄内地方からやって来た紅花商人が鹿児島城下で呉服商を開業したのが始まりだそうだ。

著者の住む鹿児島県さつま町では毎年二月に恒例の初市が開かれるが、その会場に山形県新庄市から雪のプレゼントが届く。鹿児島の子どもたちにかまくらを見せたい。新庄市のNPO法人の人たちが大型トラックの保冷コンテナに雪を満載し、約一八〇〇キロの

道のりを二日がかりで運び、初市の出し物としてかまくらを作ってくれるのである。かまぐらはおろか、本格的な雪さえ見たこともない子供たちは大喜だ。トラックの帰り便には今度は、さつま町の特産の孟宗竹で作った灯笼「竹ホタル」が積み込まれ、新庄雪まつりで灯される。

その新庄には新庄藩時代、第十代藩主・戸沢正令の正室として、島津家から桃齡院（第八代藩主・島津重豪の十一女）が嫁いでいる。戊辰戦争で新庄藩は当初、幕府軍を支持する奥羽越列藩同盟に加盟していたが、のちに急遽政府軍にくみすることになった。その背景には、桃齡院の実家・島津家との関わりがあったのではないかと推察されている。

戊辰戦争において新庄藩と対照的だったのが隣の庄内藩（今でいう山形県鶴岡市、酒田市）だった。庄内藩は、鳥羽・伏見の戦い

の契機となった江戸薩摩藩邸焼き討ちを行つた主力藩であり、戊辰戦争でも薩長を含む新政府軍に最後まで執拗に抵抗した。そのため、新政府軍に降伏した庄内藩の藩主及び藩士らは、厳重な処罰が下るものと覚悟していた。

ところが、新政府軍参謀の薩摩藩士・黒田清隆が下した処置は、温情ある極めて寛大なものだった。実はこれらの処置は、陰で西郷隆盛（南洲翁）が黒田に指示して行わせたものだった。後日そのことを知った旧庄内藩中老・菅実秀は、西郷の大徳に感じ入り、明治になると旧庄内藩士と共に訪鹿して西郷の教えを請うた。明治二十二年（一八八九年）、大日本帝国憲法発布の特赦によって、西南戦争での西郷の賊名が除かれると、旧庄内藩士らは、西郷から学んだ様々な教えを「南洲翁遺訓」という一冊の本に編集して出版した。

旧庄内藩士らは、本を背負い、全国に配り

歩き、その伝導者となった。その気概は、今も庄内の地で引き継がれている。昭和五十一年（一九七六年）には、（財）庄内南洲会により酒田市内に南洲神社が創建され、平成十三年（二〇〇一年）には、境内に南洲翁と菅実秀の対話座像「徳の交わり」が建立された。

一方、鶴岡は、愛読した時代小説家・故藤沢周平さんの出身地である。南洲神社訪問とともに、藤沢文学の面影を鶴岡に訪ねたいという長年の夢を叶えるべく初めて庄内を訪れたのは、二〇一〇年三月末のことだった。

山形市内でレンタカーを借りて、妻と二人連れの庄内への日帰りドライブは、県内陸部と庄内地方を結ぶ月山道路を通る。道路沿いは積雪を残したままだった。車窓から遠望する鳥海山、裸木のケヤキ並木が独自の風景を作っていた酒田の山居倉庫、南洲神社、藤沢小説の舞台を彷彿とさせる鶴ヶ岡城跡、質実

剛健な教育文化を今に伝える庄内藩校致道館など、有意義な庄内巡りを実現できた。

ただ残念だったのは、鶴岡市にある「松ヶ岡開墾場」の存在をそのときまだ知らなかったことだった。その存在を知ったのはつい最近のことである。

明治七年（一八七四年）になると、西日本を中心に相次いで不平土族の反乱が起きる。明治七年の佐賀の乱、明治九年の熊本神風連の乱、福岡秋月の乱、山口萩の乱、そして、最大規模の土族反乱となったのが明治十年（一八七七年）の西郷隆盛率いる西南戦争だった。こうした反乱と対照的だったのが旧庄内藩の取り組みだった。

明治維新直後の廢藩置県の折、旧藩中老・菅実秀は旧庄内藩士の先行きを考え、養蚕によって日本の近代化を進め、庄内の再建を行うべく開墾事業に着手、明治五年（一八七

年）、旧庄内藩士三〇〇〇人が荒野を開墾開拓し、明治七年には三百十一ヘクタールに及ぶ桑園が完成した。明治八、十年には大蚕室十棟が建設され、その後鶴岡に製糸工場と絹織物工場が創設された。

「松ヶ岡開墾場」は、現在、国指定史跡となっており、刀を鋏にかえて大原始林の開墾に挑んだ旧庄内藩士たちの魂を今に伝えていくそうである。開墾記念日には、旧庄内藩主・酒井忠篤と松ヶ岡開墾の志を支えた西郷隆盛開墾開拓に取り組んだ重臣の菅実秀の肖像額を飾り、床の間には西郷隆盛より頂いた「氣節凌霜天地知」の箴言の掛字を掲げて式典が催されるそうである。

いつかまた庄内への旅を実現させて是非「松ヶ岡開墾場」を訪ねたいと思っている。

（元九州職業能力開発大学教授）

人生わずかに八十年



福元 忠一

昔、人生わずかに五十年、満で数えて四十九年という歌があつた。

戦後、我が国は長寿国となり、こんなに目出度いことはないし、医学の飛躍的進歩など、有難いことと思つている。

短い人生で、一番の人生観に影響を与えたのは、七十九歳で生涯を閉じた父だろう。

父は、人間は普通に暮らせば良いのだ。他人に迷惑を掛けないで、ことさらに成功や、出世をしないで、大儲けもしないでそれで良いのだ。

祖父の代で火事を出し、小学校もまともに

出ないままで逃げるように大冒険としての出稼ぎ先は、鹿児島市内で、見込まれて、米問屋の馬車引き頭、戦中・戦後の波乱の一生を終えた父の人生訓には説得力があり、感化を受けた。

大学進学する者は少ない時代で、大学は行かなくてもよい。算盤は稽古するな、弾かせる者になればよかのだからいで、普通の人生論の影響を受け、自らの人生も、普通に暮らし、先祖の家系も、戸籍制度の以前のことと、大陸からの渡来でモンゴル系黄色人種であるぐらいの外は定かでない。

また、家を新築することもなく、四人の子供が成長し、四人の孫が家族を和ませ、質素な暮らしで時たまの旅などを楽しみ、気がつくくと、夕日は東シナ海に没するような人生にならうとしている。

いくら短い人生とて、この期に及んで回顧

録だか認めようにも、活字に残そうものなら、
数多くの・正・政・清・聖・性・醒談には、
人目を憚ること甚だしく、ひたすらに、ある
いはにんまりと、あるいは涙し、心の中で繰
り返していることだ。

この、大事な人生を、いつの日にか、壺に
入り、桐の小箱に納まる日まで、開けないこ
とにしておこう。
(元入来町長)



薩摩川内市入来町のパワースポット ～ 銭積石

裁判員制度は

司法の逃げではないか

益壽 滋雄



炉辺セイ談会のご案内を戴きまして有難うございます。以前私がりっしんべんの性談の担当ですよなんて申し上げた事があります。が、今はその時ではないと思います。謹んで追悼の意を捧げたいと思いますが、先輩の皆さんが素晴らしい追悼の文、或は詩を捧げられることと思いますので、私が駄文を弄する事は控えさせていただきます。と言いながら短文でもと言っていたいだいたご厚意に甘えて、最近の新聞記事についてけちを付けたいと思えます。お許しください。

原発事故最終報告・オスプレイ搬入・司法

研究所報告書公表など問題山積です。それぞれいいたいことがあります。その内特に司法問題について言いたいことがあります。

裁判員制裁判の参考にとあります。オウム事件後厳罰化傾向にあり死刑割合がこの二十年で四倍になっている。裁判員制度では犯罪の性質、動機、被害者数、遺族の感情等を考慮するべきだとして、裁判員は情緒的な判断に傾きがちであり厳罰的だと言っているようです。そもそも裁判員制度は司法の怠慢と云うか逃げだと私は考えます。アメリカのように有罪無罪を判定させるのなら兎も角量刑まで判断させるのは司法の逃げと云うか責任転嫁に他なりません。

医療に置き換えて考えて見ればどうでしょう。仮に癌を疑われる患者さんがいたとします。どんなに詳しい講義・論文で説明したとしても素人に診断や治療法を決定させるで

でしょうか。ここはプロがやらなければならぬ事でしょう。素人に任せるなんてとんでもないと思うのは私だけででしょうか。司法はそれほど自信がないのでしょうか。皆さんは如何思われますか。追悼のセイ談会にふさわしくない駄文で申し訳ありません。

妄言多謝。

(益寄医院長)



入来麓（国の重要伝統的建造物群保存地区）の石敢当

墨田の花火



串田 久子

紫陽花の季節になった。我が家の庭にも何種類かの紫陽花を植えていて、毎年6月に入るとあちこちでピンクや青や紫、そして白い紫陽花たちが、憂鬱になりがちな梅雨の季節に私を楽しませようと、競って咲き始める。

その中でも、私が一番好きな紫陽花が“墨田の花火”といわれる白い大きな額紫陽花だ。

額になる花びらが 白い八重になっていて中心は爽やかな薄いブルー。まるで夏の夜空に打ち上がった青い花火のよう

に見えるので“墨田の花火”と名付けられたのだろう。

数年前の“母の日”のプレゼントに、私はこの“墨田の花火”の大きな鉢植えを母に贈ったことがあった。母はこの珍しい紫陽花をたいそう気に入ってくれて、自宅の表の庭にそれを植えたのだった。そしてそれから毎年元気に花を咲かせては母を楽しませてくれた白い紫陽花。

今年も6月の声を聞いた我が家の庭の“墨田の花火”も 「ほら、今年も私を見てちょうだい！」とでも言うように、大きく美しい白い花を咲かせた。たぶん、鹿児島の実家でも“墨田の花火”は可憐に咲いているに違いない。それでも、「まあ綺麗に咲いたわね！」と喜んで花に語りかける母の姿はない。

“墨田の花火”だけでなく、母が丹精

込めて庭のあちこちに植えた花たちは母に褒められることもなく、寂しい想いでそれぞれ花を開いているのだろう。可哀そうに。花たちも可哀そうだと思うのだが、私はその美しく可愛い花たちを見ることができない母を可哀そうに思う。

心が綺麗な母だったから、きつと天国へ昇っていて、この世のものではないからこそ眩しいくらい美しい花畑の中で、今は幸せに暮らしているのだろうが、私は母に鹿児島庭に咲く花たちを見せてあげたいと心から思うのだ。

一年前の母の葬儀の時、葬儀社の方々が驚くほどの数の花が葬儀会場に届けられ、祭壇の脇にびっしりそのスタンド花が並べられた。花が好きだった母のために、父や私はできるだけ沢山の花で祭壇を飾ってあげたかったので、ご厚意で届

けてくださった本当に多くのスタンド花に、私たち親子はとても有難く思い大感激した。しかしながらそれでもやはり、あんな風に突然逝ってしまった母を想うと悔しくて悔しくて仕方がなかったのが本音だ。

庭の“墨田の花火”を眺めては、ああもう母に花を贈れないのだと“母の日”を恨めしく思う。そして母の「ありがとう！」と言う可愛い声が受話器から聞こえないのも悲しい。

こんな風に、私はこれからも毎年梅雨を迎えて“墨田の花火”に母を恋しく想うのだろうか。そして、鹿児島父もまた、庭の母の植えた花たちが咲く度に、「母に見せたい」と嘆くのだろうか。

追記

この原稿を依頼されたのが6月だったのでその時思いついたことを書き綴ってしまったが、後から考えれば発刊される真夏に梅雨の話で申し訳なかったかもしれない。どうぞお許してください。



額紫陽花



久子ファミリー、長男一家と次男を交えて

入来籠の風景

二〇〇三年、知覧武家屋敷群、出水武家屋敷群に次いで、鹿児島県で三番目の国の伝統的建造物群保存地区（武家町）に選定されました。



庶流入来院家の茅葺門



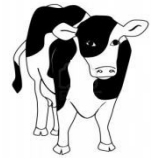
玉石垣の屋敷割り



史跡清色城跡
(入来小学校)

牛の一生から男女の

役割を考える



中西 喜彦

牛乳や牛肉の出来るまでには長いストーリーがある。これらの食品は、乳用牛や肉用牛が自分の子孫を残す為に懸命に努力している結果である。筆者は特に生命への興味から畜産に興味を持ち乳肉の生産を繁殖面から研究した。一番疑問に感じたことはどうして「牛は自分の子供のためにだけでなくこんな沢山牛乳を生産するのだろうか」と云うことであつた。結局彼らは自分の子孫を残す為に暑い日も寒い日も懸命に努力していることが分かつた。

本来我国には牛乳や牛肉の生産に向いた品種は居なかつたが欧米から輸入したそれをもとに日本の気候に向いた乳牛や肉牛を作り上げた。その技術が人工授精、体外受精、顕微授精、受精卵移植などの繁殖技術の開発である。また、効率的な交配について集団遺伝学が開発された。これらの技術は特徴を持った遺伝子を短期間に集めることに成功した。しかし、一方では産乳量は著しく増えたものの骨身を削つても泌乳を続け結果的に寿命を縮める牛も少なくない。

ところで牛の繁殖生理は人と共通の面が多い。例えば性周期は二十一日に一回排卵する。妊娠期間も二百八十五日とほぼ人のそれに類似している。半年近くほ乳する。そのようなことから畜産の盛んな欧米では牛の繁殖技術の人への応用が

四十年程前から盛んになった。例えばベトナム戦争の時には米軍兵士のかなりの人が自分の精子を凍結保存して戦場に臨んだという。また、男性不妊だけでなく、シングルマザーを希望する人の為人工授精を望む人もいるという。その際目の色、皮膚の色、血液型なども選択されている。我国でもこれらの技術は不妊治療などに用いられ始めた。このように神の領域と謂れ、コウノトリが運んでくると言われた生殖のベールがはがされて来た。

ところで人間では男女の役割はどのようなものであるか。現在は女性優位時代とも言われている。つい三十年程前までは、男は外で働き女は家庭を守るものと考えられていた。しかし、最近では女性の社会進出も進み、女性の管理職も珍しくなくなつた。一方、最近新聞やテレ

ビの話題として取上げられているものに「不妊治療」や「育児放棄」など女性をめぐる問題が話題として取上げられている。また、結婚しない人、出来ない人も増えている。しかし、寿命に限りのある生物にとつて子孫を作らないことはそのグループの消滅を意味する。「花の命は短くて」ではないが、生殖適齢期は限られて居り、やはり新しい男女の役割を考える必要がある。その為にはほ乳類に共通した雄雌の性と役割について考えてみたい。

(一) 牛における雄の役割

我国では乳用牛と肉用牛の雌はそれぞれ約百五十万頭飼育されている。種牛と称する雄は前者で約千頭、後者で約三千頭である。他の雄牛は去勢して肉用に廻される。一般に各個体の産乳量や肉質の

違いは遺伝的素質半分、環境要因半分と言われている。環境要因としての気象条件、栄養、飼育畜舎、管理技術は人為的になるべく好ましい方向に同じように調整出来ても、遺伝的素質は個体の特性に従う以外にはない。そこで後代検定と言う方法が開発された。例えば何頭かの種牛の精液をそれぞれ一グループ十頭の雌牛に種牛一頭ごとの精液を注入し、各グループの雌牛が妊娠、分娩後生まれた雌子牛をさらに妊娠させ分娩後の三百五日間の乳量を測定する。その乳量を各雄牛を親とする雌子牛ごとに比較すると潜在的に持つ雄牛の泌乳能力の高いものと低いものが判定出来る。この中でその雌子牛の泌乳能力の高かった雄牛を種牛として活用する。



○人工授精から顕微授精まで

これを可能にしたのは人工授精と言う方法が開発されたからである。牛の一回の射精精液量は約六ミリリットルで一ミリリットル当約十億の精子が存在する。従って、従来の交配では一回の交配時に約六十億の精子が膈中に放出されその精子が一個の卵子に到達する競争がはじまる。最初の関門は子宮頸管である。これを通り抜けて子宮に到達する。さらに卵管頸部を通り卵管膨大部に到達し降りて来た卵子と精子が合体する。此処に到達する精子数は多くとも二万七千ぐらいである。他は殆どは膈中に残存し排出される。精子の卵管膨大部に到達する時間は二〜十二分である。そこでまず考えられたのは六十億の精子を適当な溶液で希釈し約一億の精子を含む一ミリリットルの

希釈精液をストローに充填して冷蔵庫中で一週間保存出来る様になった。これを膣内ではなく子宮頸管口に特殊な注入器にストローを充填して注入することにより、一回の射精精液を六十回の授精に用いられる様になった。勿論精液は人工膣と言う筒状の容器に牛のペニスを誘導し横取り法と言う方法で週二回程度採取される。これに加えて精液保存法が改良され冷蔵（五℃）から凍結保存（マイナス百九十六℃）になり、今では三十年間保存したのもでも授精能力を持っている。凍結精液開発は廃棄精液量を極端に少なくした。また、一ミリリットルストローを〇・二五ミリリットルまで少量にして、一回の射精で二百四十頭の授精が可能になった。また、貯蔵のスペースも四分の一に縮小出来た。従って、現在では産乳

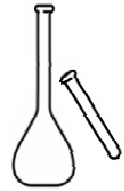
能力の高い遺伝的能力を保持する種牛の精液は一頭で数万本のストロー精液として人工授精センターに保存されている。約千頭の種牛が飼育されていれば百五十万頭の雌牛を妊娠させることが出来る様になった。

前述の様に雄の役割は牛の場合ストロー一本に集約される。さらに学問的には顕微授精と言って一匹の精子を顕微鏡下でガラスピペットに吸い込み体外成熟させた卵子に注入することで、受精卵を作ることが出来る。また、私どもの研究室では凍結融解を何度か繰返した死滅精子でも顕微授精で受精卵を作成出来ることを証明した。さらに生まれた子牛を成長妊娠させ無事子牛を誕生させることに成功した。こうして見ると家畜化された乳用牛での雄は精子由来の遺伝子提供の役

割のみしかない。

(二) 雌の役割

ヒトを含めほ乳動物は動物の中では最も進化した動物である。母親の子宮の中で胎児を育て、分娩後授乳して一定期間育てる。これは女性ホルモンと言われる数種類のホルモン群の作用が織りなす作業である。このホルモンを分泌するのが卵巣であり、さらにこれをコントロールするのが間脳・下垂体である。特に間脳視床下部は生命中枢とも言われて居り、性中枢、食欲中枢、体温調節機能などを支配している。雌は卵巣（卵胞、黄体）、子宮、乳腺・乳房と言う複雑な臓器を持っている。これに対して雄は精巣と副生殖腺と陰茎だけで乳房は殆ど発達しておらず雌にくらべるとかなり単純な構造に



なっている。

一方、ほ乳動物と言うのは一定期間乳を飲んで成長する。子牛は六ヶ月以上母乳を飲んで育つので、人間にとつては子牛を育てるのに必要な乳量以外を活用するようになった。

○泌乳と射乳。

ほ乳動物に於ける母子関係はまずおっぱいを飲むことから始まる。乳を生産する仕組みは乳腺胞と乳管があり、乳管は乳頭に至る。乳腺胞は血液を原料に乳汁を生産する。乳腺胞の周囲は筋上皮細胞と言う筋層に囲まれて居り、これが吸乳刺激や搾乳刺激でオキシトシンが下垂体後葉から分泌されると筋上皮細胞を収縮させて乳汁を体外に放出する。従つて子を育てるには、乳を合成する泌乳と体外に放出する射乳の二つの働きが必要であ

る。前者は栄養状態や環境条件が作用するが後者は子の吸乳刺激や搾乳刺激でオキシトシンをしっかりと分泌させ、生理的に筋上皮細胞を十分に収縮させることが必要である。

下垂体後葉から分泌するオキシトシンは筋上皮細胞を収縮させるだけでなく、母親の子宮を収縮させて分娩後の母体の回復を早める。このオキシトシンの分泌には非常に微妙な神経作用が関与している。筆者らの実験で放牧している肉用牛の母牛の乳量を測定しようと試みた時のことである。子牛と母牛を8時間離して乳汁の溜まったところを搾乳器で搾乳しても殆ど乳が出ない。そこで隔離していた子牛を一分間だけ吸乳させ、それから搾乳器を用いると三キログラムほど搾乳出来た。これは慣れない搾乳器の刺激で

副腎からアドレナリンと言うホルモンが放出され血管を収縮させるため、下垂体後葉からのオキシトシンの分泌が阻害されるためである。この現象は搾乳器に慣れた乳用牛でも搾乳中に驚かしたり、不手際で蹄を傷つけたりすると、当然搾乳量が減少する。

○泌乳と環境

南九州は夏の暑い期間が長い。沢山牧草を食べて乳を出すためには暑さは乳用牛に取っては不利な環境である。そこで筆者は気温と泌乳の関係をマウスを使って調べてみた。マウスは二十日ネズミと言われる様に妊娠期間が二十日、授乳期間が二十日で重さも二十グラムから三十グラムと恒温室で飼育するのが容易である。分娩二日ぐらい前のマウスを三十三℃の恒温室で飼うと分娩時に全部子マ

ウスを食べてしまう。しかし、三十二℃で飼うと全部子供を育てる様になる。二十℃の環境で飼育すると母マウスは子育てしない時の倍の餌を食べ、3割ぐらい体重が増加する。しかし、三十二℃で飼育したマウスは餌を食べる量を減らし自分の体重を減少させながら子育てをする。離乳の頃は親子の体重があまり変わらないくらいに身を削って育児をしている。これで見るとたった一℃でも微妙な差があり、自分が生き残るか、子供を育てるのかの本能的な選択があるように思われる。また、一旦子を育てる方に流れが出来る。途中で中止出来ず逆に母親は自分の蓄えた栄養と外からの栄養を調節しながら暑い環境のもとでも泌乳を続ける。



(三) 家畜の一生から人の生活を考える てみると

筆者は「人は何の為に生きているのか」と物心ついた頃から考えて来た。所詮人間も動物の一種であり、食う為の生業に理屈をつけて生きて行くに過ぎない。道元の言う「食に道心無く、道心に食有り」と言う様に食い方に何か理屈をつけて生きているが、子孫が出来なければその集団は消滅する。子孫を残すには雄と雌で役割分担がされている。まずは必死になつて食べて個体維持を計り、条件が整えば子孫を残す。一連の繁殖技術の発達により、雄の役割は「染色体をもつ遺伝子情報を雌の卵子に運ぶ役割に集約される。精子に尾があるのは卵子に辿り着く為に必要なである。しかし、顕微授精の技術で一匹の精子をピペットに吸込み卵子に注

入出来る様になった。また、死滅した精子でも卵子に注入して受精させ子牛にまで発育させる能力があることが分かった。雄の精子は永遠に保存出来るようになった。

人は個人を尊重する限り、代々受け継いだ自分の遺伝子を次世代に繋ぐ為には、長期間自分の精子を何時でも提供できるように保持する必要がある。一方、アメリカの話で人工授精での妊娠依頼を受けた医師が自分の精液を提供して七十数名の子供が出生したとの記事を昔目にしたことがある。薩摩藩では島津家十八代家久公三十二名、十九代光久公三十八名、二十五代重豪公二十八名を最多の子福者として、歴代藩主が多くの子孫を残して居られる。薩摩藩に暗君なしと言われるのも選抜の基礎数が多いことおよびその

子孫同士の助け合いによることもある。一方、酪農業や繁殖肉牛農家では一頭の雌牛に一生涯に何回子牛を生ませるかによって収益が異なっている。多数回出産させるには性成熟後身体の基礎が出来た頃に交配し、十ヶ月後に分娩し、子牛を育て、その間授乳中に妊娠しまた子牛を出産する。畜産業と言うのは如何に雌牛に危機感を与えない様面しながら最大限に乳や肉（子牛）を生産する生業である。

人に於いても生物的な生殖適齢期や妊娠・分娩・授乳は厳然として存在する。人類の歴史が始まって以来色々な形態でこれらの一連の作業を包括して子孫を繋いで来た。現代では核家族化して、家、職場および地域社会などのヒトの次世代を繋ぐシステムが希薄になって来ている

ように思われる。確かに金銭によって、色々な施設は利用出来る。しかし、子孫を残す行為は私的な面と社会的な面の微妙な重なりがあり、所謂動物的行為は強いて言えば牛と同じ生理がある。その結果、一番弱い所から順に前述のようなほ乳類独特の子孫維持システムはトラブルを受ける。子を産まない。不妊、育児放棄などはその結果である。これは物質的には昔より恵まれても精神的には不安定な世相になって来ている。人の社会では色々なストレスがかかり、神経・内分泌系が瞬時に反応する。子を捨てて自分が生き残るか、自分の身を削って子供を育てるかの繁殖過程の重要ポイントでの選択がある。



(四) おわりに

最近の週刊紙「東洋経済 平成二十四年七月二十一日号」の特集に「みんな不妊に悩んでいる、原因の半分は男性です」とある。大きな要因の一つとしては結婚年齢の高齢化が指摘されている。また、三十五歳を境に女性の妊娠力は低下することを知っているかとの質問に、カナダで八十一%、英国では七十一%の人が正解だったのに対して、日本では三十%であったと言う。牛の繁殖を研究してみると、繁殖生理的なものは殆どヒトと変わらない。生殖適齢期をはじめ妊娠・分娩やほ乳など、牧畜と縁の深い民族とそうでない日本人との生物に対する知識の違いがあるように思われる。

さて出生の話題の次に死後のことを考えてみたい。最近都市部では樹木葬と言

う名前で墓地公園に合同葬を行う例が報告されている。身寄りの無い人や子供に心配をかけたくないと縁を切って、自分や夫婦単位で公共団体などに死後の埋葬を依頼するものである。さらに、散骨などの話も聞く。心情的には同感の部分がある。

しかし、両親や祖父母さらにその祖先があつての自分である。筆者は父存命中に菩提寺に頼んで納骨されている祖先の名前を書き出して貰ったことがある。父より前六世代の当主と類縁者の死亡年齢と名前があり、約二百五十年間のものであつた。これから前は苗字も無く、屋号も無くお名前だけではどなたが埋葬されているか分かりませんと言うものであつた。先祖は自分が住んだことの無い福岡県遠賀郡芦屋町と言う遠賀川の河畔に位

置し、昔は貿易で盛んな土地だったという。これらの情報は自分のことを考える上で大変役に立った。その時やつとお寺の意義を理解したのである。人は無からは生まれれないと言うことを。

さて、遺伝子については面白い経験がある。筆者は四歳の時に母と産後が巧く行かず死別した。その後父は再婚し四名の子をもうけた。高校三年で勉学の意欲を喪失している時に、ひどく父に叱られたことがある。「自分は五人の子供が居り、子孫を残せた。しかし、君のお母さんは君しか子孫がない。万が一病気でなくなつて死んだらお母さんに申し訳ないと思ひハツパを掛けたことがない。しかし、一度位死に物狂いで勉強してみろ」と言うものであつた。内心にわだかまるものがあつたが、兎に角大学、大学院と入学

しどうしても方向性を定められずにいた。大学時代の恩師に勧められ鹿児島大学に就職し、当時大学構内にあった学内牧場に搾乳の手伝いに行きどうしてこの連中はこんな乳を出すのだろうと改めて疑問に思った。しかし、魚が海中に無数の卵を産卵する様に、ほ乳動物でも子孫を維持するために懸命に努力していることを理解した。

そこで、就職後四年経ち三十一歳になった時に周囲の人に誰か嫁になる人は居ないか頼んで廻った。六ヶ月位して数件紹介を頂いた中で、六人兄弟の末っ子で大変健康な家庭であるとの紹介があった。妻は当時二十七歳で高校教師をしていたが、見合い後数ヶ月で婚約・結婚と進みハネムーンビービーで二月、次いで五月および八月と十五ヶ月間隔で三児を得た。

父が七十七歳の時叙勲祝いに、忙しくて殆ど尋ねていない福岡の実家に家族を連れて訪れた時のことである。父は長女が当時十九歳であったが、指差してあの顔は君のお母さんそっくりだと言うのである。七十七歳の老人が少しほほを赤くして感激している様子に親としては真にけつたいな気持ちであった。父はその四年前にも亡き母の姉の所に小生を連れて行き彼女が母そっくりだとの紹介をしてくれた。小生の生まれた昭和十二年頃は写真も少なく、新しい母に遠慮して亡母の写真も殆ど残っていず、その顔を良く知らなかったのである。時移って筆者も六人の孫に恵まれた。それぞれ何処は誰に似ていると喧しい。筆者は良いところも悪いところも皆ご先祖様の所為にして、自分分は遺伝子の仮の宿と主張している。こ

ここで亡き母の遺伝子も分散して所を得た
だろうと思っている。

ところで現在ののような女性の社会進出
の盛んな時代、昭和のように男性が女性
を養うと言う考えは通用しなくなった。
しかし、男性は常に種を運び畑を耕し、
遺伝子を次代に繋ぐ宿命をもつ。若い頃
先輩教授が奥様と死別され、再婚され
挨拶に行った時のことである。一杯飲んで
の話であるが、「中西君三本目の足も使わ
ないと萎えるよ」。新しい奥様の話は「心
身ともに落着きましたわ」とのことであ
った。今もこの助言を多としている。

(鹿児島大学名誉教授)



鹿児島大学入来牧場全景

四百三十字の裏で



渋谷 繁樹

二〇一二年八月二十四日の午後六時五十四分前、鹿児島県の民間放送の一局で、一週間に一回、報道随筆を担当している還暦を過ぎた新聞記者は、時刻ギリギリまで、何をしゃべるか、迷っていた。あらましは原稿にして事前に送信しているけれど、口を開いたらゼンゼン別の話になってしまう場合もある。

出番が来た。「こんばんは」とスタジオのアナウンサーに呼びかけられて、二分行間、字数にして四百三十、テレビ随筆が始まった。

「夏休み終盤の恒例行事となりました宿題お助け活動が始まっております。お母さんからのお電話には別に驚かないんですが、孫から頼まれましてというお話が数件あって、ご苦勞様ですね、と思わず申し上げてしまいました。家族の単位が小さくなっていますから三世代総動員であたつてらっしゃるんでしょう。人生の大ベテランとしての智恵が大いに発揮されればいいですね。(序破急の序で滑らかに滑り出せば、後は波に任せる)

こちらもベテランのはずなのに首を傾げさせるのが、韓国の大統領。当方、吸うのは韓国製煙草、夏のスタミナ源は韓国のなんでもかんでもぶちこむ鍋で、先日も韓国に行ってきたばかりですので、一寸、気になります。

今のところ、頂くご意見も友好を再確

認したいとみなさん冷静にお考えのようですが、そうでなくても、台風で荒波が立つのが、日本韓国中国を取り巻く海です。波を鎮める智恵を出し合う対応を、どの国にもお願いしておきましょう。大人というかベテランというか、あんまりカッコしない穏やかな境地もいいんじゃないかという、鹿児島折本さんの俳句です。『聞き流すことも覚えて秋扇』

しゃべりながら、二百三高地から大連の港を眺めた夏を、思い出していた。大日本帝国にしろロシアにしろ、清というよそ様の土地を舞台に、派手な戦いを山でも海でも繰り広げた、中国と戦争論を闘わせる際、踏みにじったのは中国の大地、という地点から逸脱はできない。すぐ激す。平気でウソをつく。反省はしない。相手をしていて疲れる特質ばかり備

えている民族だけれども、近世史で最初にケンカを売ったのはコチラだから、「小日本は、人民解放軍を出動させて殲滅してしまえ」と罵られても、オー、上等だ、やってもらおうじゃないか、というわけはいかない。

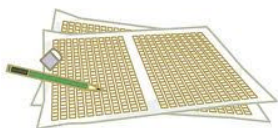
韓国の方は、ついこないだ、六月に行ってきた。円がかなり高くなっている、実勢で二十対一くらいの買い物感覚になる。日本では飲み出すとツマミをほったらかしてしまうカラノミ派なのに、韓国では頻繁に箸が動く。何度も同行している知り合いに「アンタはほんとはこつちの民族なんじゃないの」と、いつも言われる。市場でも堂に入ったもので、エゴマ（オオバ）の漬物なんか、料理屋のオカミがアタシでも見つけきらんと感心してしまう逸品を、手もなく掘り出したり

する。

韓国民族の特徴といえ、見栄っ張り、に尽きる。自意識が漲っているから、若い女性は化粧品に金を遣い、整形に平気で挑む。オバサンになると、チリチリパーマにアッパッパと豹変するけれども、ロシアも少女とオバサンはおんなじ民族とは思えないから、遺伝子が違ってくる、人間の質が違ってくる考えた方がいい。韓国男もショーウィンドーに映る自分を眺めてウツトリ、の手合いが多い。

中国人民ほど柄は悪くないが、韓国人民にも日本人民は分が悪い。誇り高い人民を征服した歴史は消えない。今度の韓国大統領の行動は洗練よりも稚拙が前面に出ているにしても、負い目を持つている方があからさまに批判してしまうと、角は立たざるを得ない。

放送で引用する俳句類は鹿児島の人がつくった作品に限っている。今回は随筆内容に即したわかりやすい俳句だったかなと考えながら、最後の決まり文句の「読者室でした」につないでいく。四百三十字を声に出している間、心は、日本、韓国、中国を、行ったり来たり、今後の往来も盛んにと祈りながら。(新聞記者)



編集後記・・・

早いもので故入院貞子さんとお別れして一年四ヶ月過ぎました。今年命日月の五月には重朝さんが高城書店から「貞子の語る入来文書」と「茅門のある町から」を出版されました。拝読しますと夫の故郷をこよなく愛し、家族への愛、さらに皆様と絆を強めたいとお気持ちを変えて感じます。さらに、本冊子が故貞子さんの思いを受け継いで縁のある方相互の絆を強めることが出来ればと願う次第です。今回は入院家の長女串田久子さんをお願いして寄稿頂きました。額紫陽花の思い出では、勝手な主張を是とする本冊子に心温まる話題を提供頂いたと有難く思っております。編集担当（中西喜彦）

人間の身体には、時間の経過を感じる体内時計と呼ばれる時計があるそうです。この体内時計は、歳を重ねて新陳代謝が弱まるとそれに準じてゆっくりに進むようになり、その結果、相対的に外の時間の経過がはやく感じられるようになるのだそうです。

いうわけで、昨年の第7号の発刊からあつという間の一年でした。

第8号も、文集のレイアウトとイラスト挿入および印刷所との折衝を担当させて頂きました。第7号の書式を踏襲しましたが、細かいところで迷ったところは、第6号までの文集を聞いて、故貞子さんの編集フイーリングを参考にさせて頂きました。

皆さまの珠玉の原稿、有難うございました。

編集担当（下土橋渡）

「炉ばたセイ談」 第8号

炉ばたセイ談会会長 桐野三郎

編集担当 中西喜彦

下土橋渡

事務局〒895-1402

薩摩川内市入来町浦之名130

入来院重朝方

電話・ファックス 0996-44-3586

印刷 新大同印刷株（0996-30-1811）



平成 24 年秋
第 8 号

〒895-1402

薩摩川内市入来町浦之名 130

炉ばたセイ談事務局